



→まるで自分に注目してくれない客に、さすがのクマもしらけてしまった。話に夢中になるのもいいが、それなら矢切の渡しに乗らなくてもいいのに、といったかどうか……。



↑さわやかな表情を見せるフキノウだが、目を大地に転じると、けっこう汚いのだ。物事はどこを見るかによって美醜がわかる。

三月十三日の土曜日から平常運航が始まった。月曜日の定休日、荒天の日以外は営業される。ようやく若舟頭の機嫌がよくなりかけてきた。

初めて乗ったという東京都大田区が多摩川近くからやってきたというご婦人ふたり。乗っているクマには目もくれず話に夢中。

「いいわね、のどかなこと」

「東京にもこんないいところがあったのねえ」

しばらく昔話に花が咲いていたが、とつぜん若に矛先が向いた。

「ねえねえ、舟頭さん、ところでこの川、魚がいるの？」

「そりゃ、いますよ。川だから……」
ムツとしたように応える若舟頭。

「どんな魚？」

「いろいろ」

若が無口になりそうだ。

「いますよ、こんな魚」

若にかわって助け船をだす。両手をいっぱに広げて見せる。

「うっそ〜」

「うそじゃないですよ、ねえ、舟頭さん、いますよねえ」

今週のクマ

若舟頭にじゃれつくクマ。朝晩の散歩はもちろん、こんなふうにはんきで遊んでくれるのは若舟頭。クマもほんきで若にぶつかっていく。こういうのが、犬にとっていい関係なのだろうか。



→まさか、年度末恒例の“駆け込み工事”ではないだろうが、江戸川に架かる新葛西橋の耐震工事がいきなりはじまった。



「クジラ？ それともイルカ？ そんな大きな魚が川にいるわけないじゃない」「それがね、いるんですよ。ねえ、舟頭さん。いるよねえ」

若に話を振った。

「ハクレン、ソウギョ、アオウオ。コイだっているよ。二メートル」

「こんなところにイ？」

「そう、この川に」

「そんな大きな魚がいたらニュースになるわよ、ねえ」

おともだちに同意を求める。

「そうよ、テレビでも見たことがないわよ、そんなの」

だんだん若が不機嫌になった。せっかく平常運航で気分一新、さあこれからだというときに、若は水をさされたような顔をしている。

「テレビでも見たことないのにね」

不満そうに、ふたりのご婦人は舟をおりていった。

若がぼつりといった。

「いまの人は他人の話を信用しないんだね。テレビだと自分で確認した気になるんだろうね。うそでもなんでも……」

これじゃ先が思いやられるね、と若は不満そうだった。